

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-85

学校名・団体名	北栄町立北条中学校
HPアドレス	http://www.torikyo.ed.jp/hojo-j/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	地域に根ざして課題の発見・解決を促すプロセス の構成
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本研究は、生徒一人ひとりが地域に根ざした学習を進める中で、「自分の」課題を発見し、「友だちとの協同の中で」その解決を図る学習を実現するには、どのような習得・活用・探求プロセスの構成が求められるのか、学習環境と学習過程の両面から明らかにすることを通して、ICTを活用した思考力・判断力・表現力を育む授業づくりを進めていくことを目的とします。</p>	

1. 活動内容

A. (1) 教科：国語科 (2月頃)

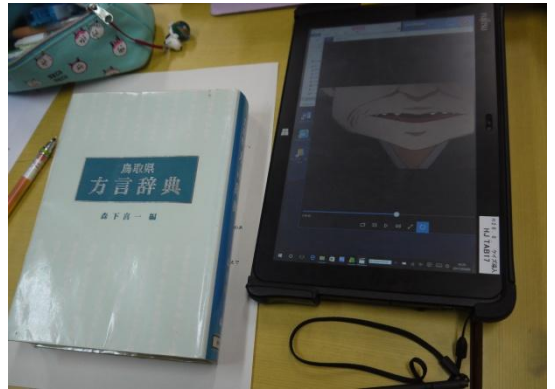
(2) 対象者：2年生 (61名)

(3) 題材名：「本町出身者が原作しておられる人気アニメーションを、方言でアフレコしてみよう。」

(4) ねらいと活動内容：鳥取県は方言の宝庫で、東部の「因州弁」、西部の「雲伯方言」は特に有名ですが、中部に位置する本町では、中部の「倉吉弁」にそれらが入り混じり、生徒も日常的に方言を使っています。生徒一人ひとりの課題意識に即して、それぞれの方言の違いに着目したり、鳥取県の方言に関する書籍などから由来を調べたりする中で、地域特有の言語と文化について興味・関心を深めたいと考えました。そして、調査活動のまとめとして、タブレット端末で「本町出身者が原作しておられる人気アニメーションを方言でアフレコしてみる」活動を通して、方言の持つ暖かさや生活に根ざした意味合いを味わう活動を展開しました。学習を通じて、主な方言については標準語との対比で表裏両面印刷・ラミネートして、方言集として保存・掲示できるようにしました。



生徒にとって身近と思われる方言ですが、方言と思われる言葉として当初生徒があげたものの中には、いわゆる「ギャル言葉」なども含まれ、方言について理解が十分とはいえない状況も見られました。アフレコでは、「本町出身者が原作しておられる人気アニメーション」で鳥取を舞台とした放送回を題材としたので、「確かに鳥取の言葉だけれど、私たちのところの方言とは違う」と、県内の地域による方言の違いにも着目できました。そのことを通じて、「鳥取県の方言」や「北条町史」など、身近な言葉についての参考文献に当たって調べようとする姿勢も活発になりました。また、実際のアフレコでは、台本を北条町で普段使われる方言を用いて自分たちなりに作り直し、イントネーションにも気をつけながらタブレット端末で練習して、班で協力して吹き替えを行うことができました。



B. (1) 教科：社会科 (9月頃)

(2) 対象者：1年生 (76名)

(3) 題材名：「私たちの町の変化を見つめよう」

(4) ねらいと活動内容：私たちの町北条町は、砂丘地の開拓により礎を築いた町で、小学校でも先人の足跡に学ぶ取り組みを行っています。社会科で地理の学習に取り組む際に、郷土の変化について地元の歴史資料や写真資料を収集・整理し、地図アプリ・航空写真アプリなどと照らしながら変化の様子をまとめ、客観的に町の変容の様子を調査・発表する学習に取り組む中で、変化の背景にある人々の営みに着目する学習を展開しました。

これまで本校では、この取り組み町内資料をもとに、教師が指導する形で進めてきましたが、今年度は、それを、生徒が自分の課題意識で問題を設定して、調べ学習として取り組み、レポートを作成する形としました。そのことにより、同じ開拓の取り組みを題材としていても、砂丘地の地質的な面に着眼したもの、開拓者の人となりをつづったものなど様々な視点から活発な調査活動を展開できました。

また、研究レポートはA4サイズのレポート用紙で提出したのですが、できるだけ多くの人目に留まるよう、大判印刷して廊下に掲示したことにより、他の人の工夫した取り組みを食い入るように見つめる姿が多く見られました。



C. (1) 教 科：社会科 1 1 月頃)

(2) 対象者：3 年生 (7 1 名)

(3) 題材名：「私たちの町『北栄町』」

(4) ねらいと活動内容：鳥取県中部地震からちょうど 1 ヶ月後、本校の体育館も使えず、文化祭も小学校の体育館を借りて行うような状況の中でしたが、北栄町長をお招きして、公民の学習の一環として私たちの町北栄町の現状と今後の課題について、テーマごとの調べ学習とその発表を行いました。

本町は、砂丘地を中心とする農業、風車などによる自然エネルギーの利活用、人気アニメの『聖地』などとして、県内外に知られています。数年前、「大人になっても北栄町に住みたいか」を問うアンケートで、「住みたい」と回答した生徒の割合が 2 割を下回った状況に危機感をいだき、町と連携して、自分たちの町の将来を展望する学習に取り組んできました。

今回の学習では、震災直後の多忙な時期にもかかわらず、町長自ら本校に足を運んでくださり、防災服姿で生徒の発表を直に聞いてくださり、町の将来を担う生徒への熱い思いを語ってくださいました。震災直後という時期で、生徒の課題意識もとても高く、タブレットに集約したプレゼンを町長に語りかける様子も力がこもったものになりました。また、震災からの復興への思いを語られる町長からの言葉に対しても、うなずきながら、真剣に耳を傾ける姿が印象的でした。



D. (1) 教 科：英語科 (1 0 月頃)

(2) 対象者：3 年生 (7 1 名)、2 年生 (6 1 名)

(3) 題材名：「北栄町英語MAPを作ろう」

(4) ねらいと活動内容：私たちの町北栄町は、人気アニメーションの「聖地」として毎年多くの観光客が国内外から来られます。英語科の学習の一環として、これらの名所を紹介する動画を制作したり案内パンフレットを制作したりする活動を通して、これまで学習してきた英語を活用して適切なキャプション作成や効果的な表現方法を考察しようとしてしました。

それらを拡大印刷したり、ラミネートしたりして、町内の観光スポットなどに表示することを計画していましたが、10月の鳥取県中部地震の影響で、生徒の校外活動が当面行えない状況となったため、いくつかのスポットについて、案内表示の作成を試みる程度の実践となりました。

2. 成果と来年度への課題

生徒一人ひとりが自らの課題を見出し、その解決に向けて習得・活用・探求プロセスを構成することにより、習得の場面では生徒が自分にあった課題に向き合う学習となり、基礎的・基本的事項の定着がより図られることを期待して実践を進めました。生徒一人ひとりが課題意識をもって取り組める題材を取り入れたので、調査活動でもこれまでにない視点からのレポートが散見されました。判断力や表現力についても、受身の学習や、一律の課題への取り組みと異なり、「自分の課題」という意識が生徒の活動を活性化したように感じています。

このような取り組みを通して、生徒一人ひとりがいっそう仲良く協力できたり、力を合わせて課題を解決できたことに対する喜びを共有したりして、学習の場面に笑顔も増えたように思います。

大判印刷やラミネートによる保存・掲示を行ったことにより、広く学習の成果が公開できました。自分のA4判レポートが914mm幅の大判で印刷・掲示されて、生徒も驚いてお互いの作品を見合ったり、タブレットに保存したプレゼン資料を見せ合ったりしながら、学習の共有が深まったように思います。

今年度、一部震災の影響で開催が見送られたものもありましたが、本校の多くの教員が県内はもとより中国・四国地方の研究大会で発表を行いました。その中で、本校生徒の発表力や表現力については、多くの授業研究会や研究大会で好意的な評価をいただきました。

これらの成果を活かし、今後も地域を題材としながら、ICT機器を活用した習得・活用・探求プロセスによる学習展開を一層進めていきたいと考えます。特に、震災被害の考察や復興に向けた思いや願いを中心に置いた学習については、生徒の一番切実な課題となっていますので、来年度さらに取り組みを進めたいと考えます。